



私がつくる・みんなと創る

美術科

寺田 実

I はじめに

伊藤若沖の「鳥獣花木図屏風」をデジタルアートとして現代に蘇らせたアート集団がある。その集団は、プログラマーやエンジニア、数学者、建築家、CGアニメーターなど情報社会の専門家400人あまりから構成されており、まさに未来を展望する仕事の在り方が伺える。これからは、今、私たちが目にしている社会が、ネットワークやデジタルという概念で塗り変えられ、様々な分野の職業が境目なく入り混じることが予想される。それに伴い、これらの社会に貢献する人には、協働性が求められる中で、自分の個性や創造性をいかに発揮し、集団に貢献できるか、そのような資質・能力も必要となるだろう。

昨年、文部科学省²⁾教育課程企画特別部会から出された『論点整理』には、美術科が育むべき資質・能力として、芸術を学ぶことを通じて育まれる感性、自分の意図や発想に基づき表現を工夫していく過程での思考力などがあげられている。情操教育という美術科の目標に込められた意味を踏まえつつ、来るべき社会を見据えた新しい美術教育の在り方を模索したい。

美術評論家ハーバード・リード¹⁾は、著書「芸術による教育」第5章「表現の目的」の中で、美術における表現は、「コミュニケーション、またはその試みであり、さらには、他者からの返答を求める提案である」と述べている。生徒が自ら描きたい、つくりたい、より深く鑑賞したいと思えるようになるために、また、仲間とともに創造する意味や喜びを実感できるよう導き、美術科における「自律」と「共栄」に向かう学びの在り方を探究することで、めざす生徒の姿の実現に迫りたい。

II 教科研究内容

1 美術科における「自律」と「共栄」に向かう学び

(1) 【A表現】に関して

創造活動は、基本的には個による表現活動といえるが、発想、構想した内容を自ら試行錯誤しながら形や色彩に表していくものであり、それを他者の表現と照らすことで自分の個性を実感することができる。作品として形作っていく過程で、自分が考えつかなかった他者の発想・構想、創造的な技能面での工夫にふれ、その中から自分の表現をより高めるものを他者から取り込んで表現することで、新たな表現の工夫を知り、自ら制作する意欲を生み出すことで「自律」に向かう学びとなる。

また、自他の作品の構想から完成に至るまでの過程で、自分の作品のみならず、他者の作品の表現の高まりを促す支え合いがなされることで、「共栄」に向かう学びとなる。他者の作品もまるで自分の作品であるかのように思い、関わるような心情を育み、個と集団双方の高まりをねらう。

(2) 【B鑑賞】に関して

表現活動における短時間での鑑賞の機会を効果的に取り入れ、「A表現」と「B鑑賞」の相互の関連を図る。あわせて教科内・他教科・領域の関連を図ったカリキュラム構築を基に、学んだ内容が繋がっていくように意識することで、習得した知識や技能、体験を基に、自らすすんで他者と関わるための素地が築かれるのである。

作品の鑑賞は名画などの鑑賞の他、生徒同士の作品鑑賞会がある。とりわけ互いの作品を見合う機会を充実させ、中間鑑賞会を行う。互いの作品を見合う際には、作品の制作過程を視覚化し、作者の思いなどを対話によって創造的に感じ取ることを一層重視する。そうすることで、自分が作品から感じ取れなかった多くの視点を他者から得ることとなり、作品に対する多様な見方、考え方を取り入れ、作品に対する新たな価値を自ら生み出そうとする意欲を引き出す。このような創造的な鑑賞によって、自分の見方や感じ方の視点を広げ、自分が感じ取ったことを豊かに表現し合えるような学びへと導くことで、生徒は切磋琢磨しながら共に高め合い、「共栄」に向かう学びとなる。

2 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

(1) 「自律」に向かう視点の手立て

① 制作の過程を視覚化するアイデアプロセススケッチ

アイデアスケッチは、生徒が発想、構想した完成予想の作品を描いたり、構想の過程で構成要素として用いるモチーフなどを描いたりするものである。アイデアプロセススケッチは、作品の制作過程について構想するいくつかの場面とその流れを表すスケッチである。思いついた案を自由にスケッチしたり、資料を貼って整理したりするアイデアノートと併せて用いることで、漠然としたイメージに向かって制作するのではなく、見通しをもった取り組みとなるよう導く。実際に制作してみなければ描けない場合は、後から描き足していくことも可能とし、作品鑑賞などを受けて構想を変更する場合については、スケッチに加筆して更新する。このようなスケッチの形式を取り入れることで、自分の構想の過程を視覚化することができる。

作品を制作する過程ではその形や色彩の表し方、表現技法などにおいて実に多様な方法が考えられ、他者の構想の工夫について興味を抱いているし、自分の制作過程についてもアイデアプロセススケッチに描き表すことで課題意識をもっている。その上で、生徒同士がアイデアプロセススケッチを見合う機会を設ける。互いの発想・構想の工夫から自分の構想をより豊かにふくらませるアイデアを参考にしてその考え方を取り入れることで、新たな表現の工夫を知り、自ら制作に向けた意欲を生み出すのである。

② 自己の学びの過程を捉えるアートプロセスカード

アートプロセスカードは、毎時、授業の終わりに、成果と課題を記録する自己評価シートである。今次研究では、他者との関わりから自己を捉えた上で、その時間の学習が目標に対してどのような成果が得られたかを振り返ることを重視した。次時に向けて課題を解決するためにどのような表現の工夫ができるのかということについて、見通しをもって計画することで自己の学びの過程を捉えるものとして活用する。

例えば、授業の目標は、授業前に美術系の生徒とともに前時の授業の進度や課題を踏まえて設定する。係生徒が板書した目標を基に、各々の生徒は、前時の自分の課題に沿った目標として捉え直して設定するのである。また、印象に残った作品を記入する欄を設け、授業後半の記入時、他者の作品にも目を向けて、そのよさや美しさなどのうち自分の作品に取り入れられそうなことに意識が向くようにする。毎時の振り返りが積み重なると、自他との関わりから自己の学びの過程や成長を捉えられるものとなる。

アートプロセスカードは、これまで個人での記入を中心に行ってきたが、グループで記入したり、その内容を全体で共有したりするなどして活用する。生徒が自他との関わりから学びの見通しをもちながら、解決の方法を構想したり自分の表現をより高めるための表現の工夫を取り入れたりを通して、新たな表現の工夫を知り、自己の学びに見通しをもって取り組む意欲を生み出すのである。

(2) 「共栄」に向かう視点の手立て

① 他者の作品とのつながりをもたせる題材の工夫

通常の表現活動において、生徒は、それぞれ自分が表したい主題や伝えたい思いに基づいて作品を制作している。その上で、主題や伝えたい思いが似た生徒同士でユニットを組み、積極的な関わりがもてるよう条件を設定し、個人での制作でありながら、学級内、共同で制作している感覚をもって表現できるようにする。「自律」に向かう視点でのアイデアプロセススケッチを基に、他者と関わりながら表現活動を進めることで、互いのコンセプトが共有でき、ともに切磋琢磨して高め合おうという意識へと結び付くのである。

他者からの意見は、自分だけのものではなく、広く同じ主題を選択している仲間に対するものになり得るし、自分が意見を述べるときも、個人ではなく、複数の仲間に対して言うことになる。このように、他者の作品とのつながりをもたせる題材を工夫してデザインすることで、生徒は自ら関わりを求め、共に生かし合い、互いの成長を支え合うことを目的に、学級全体のことも大切にしながら作品を制作するのである。

② 対話による鑑賞・評価

他者の作品を見る機会は、自分の発想の視点や課題解決に向けた学びの道筋を方向付けるヒントを得られるという意味で価値ある場といえる。作品が完成した後に行う作品鑑賞会は、仲間の作品を見合い、互いの表現の工夫や意図について聞き合ったり、課題について批評し合ったりするものである。加えて制作途中及び作品が完全に仕上がっていない状況でも他者の作品を見る機会を意図して設ける。黒板以外にも教室内に作品を見合える場所を設け、そこに自然と生徒が集い、互いの作品を展示して鑑賞できるようにする。

そのために重視するのは、生徒主体で他者の作品を積極的に見る姿勢の習慣化である。教師からの指示を待って行動に移すのではなく、自ら自分の課題を解決するための視点を見いだすため、能動的に他者との関わりを求めていけるような環境設定を行う。鑑賞の授業で課題解決に向かう場面では、視点を明確にした上で対話による評価を行う。ここでいう評価とは、教師が生徒の学びを捉えて促す機能と、生徒間の相互評価をさす。他者の意見に触発されて意見を述べやすい雰囲気づくりを意識することで、自他の多様な意見が交わされ、今後の作品を制作する上での視点が明確になったり、作品の新たな価値が生み出されたりする。教師は生徒同士の対話から生徒相互の評価を促す役割を担う。こうすることで、関わるもの同士の全ての成長を願い、生徒は、切磋琢磨しながら、共に高め合っていくのである。

Ⅲ 実践例

「私との対話」 内容：A表現(1)ア(3)アイ 第3学年 時数：9時間

1 題材の価値とねらい

自画像は、今の自分とじっくり向き合って自己と対話し、形としての特徴だけではなく、自分のよさ、将来の夢など自分自身の内面も見つめ直して表現することで、新たに発見する自分を表すことに価値がある。

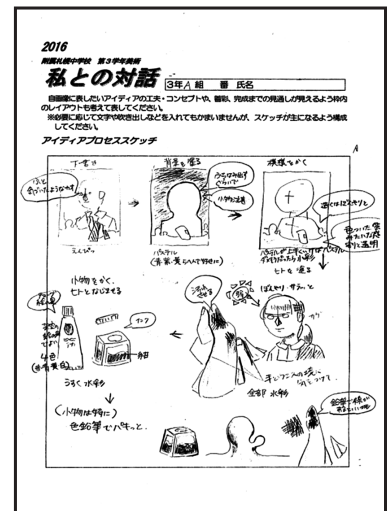
構想にあたっては、主題を基に、表情や自分の向き、画面構成など人物描写における表し方において思考力を育む側面と、これまで学んだ表現技法、用いる描画材、色彩の表現などから主題をより効果的に表すことを選択し構想を練る能力を育める題材といえる。色彩に関する知識、画面構成などの技能を活用し、部分への着目と全体を見渡すことを行き来しながら試行錯誤して制作を進めることで単に自分の顔の再現にとどまらない、自分という人物像の表現まで高まった自画像に向かって創造的に表現する力を培える題材である。

2 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

自律① 制作の過程を視覚化するアイディアプロセススケッチ

制作が始まって4時間目。生徒は、自画像の下描きを終え、大まかな作品の完成予想はアイディアノートに描いている。この時点で、着彩の進め方や配色の工夫などを、その過程が明確になるようにアイディアプロセススケッチ【図1】に描く。色鉛筆、ポスターカラー、水彩絵の具などの描画材の選択、モダンテクニックなどのこれまで学んだ着彩技法の活用、色彩表現の工夫など、組合せや手順の構想を明確にして着彩計画を視覚化することで、見通しをもって制作に取り組むことができる。

また、生徒同士がアイディアプロセススケッチを見合う機会を設けることで、互いの発想・構想の工夫から自分の構想をより豊かにふくらませるアイディアを取り入れ、より工夫した表現を見いだすことで、自ら計画した彩色の進め方や描画材を組み合わせた表現を試してみたいという意欲が喚起されるのである。



【図1】

共栄② 対話による鑑賞・評価

これまで、制作途中での鑑賞はグループでの交流が主であった。そこをあえて、学級全体での中間鑑賞会として設定する。自分の作品制作からいったん距離をおき、少し離れて自分の作品を見つめ、仲間の作品とともに並んだ自他の作品を鑑賞する。互いの作品についての課題を共有した上で対話の視点を明確にして意見を交わし合う【写真①】。自分の作品に取り入れられそうなことを模索しつつ、他者の作品をより工夫して表現するための意見も述べ合う。こうすることで、他者の作品の課題にも気付き【写真②】、自他の作品を共に制作している感覚となる。また、鑑賞による生徒の気づきを捉えて、今後のより高まった表現をめざした修正のポイントについて、対話による評価機能を用いて生徒の制作への意欲を促す。



【写真①】

3 学習の流れ

- ①題材のねらいや条件等についての理解
- ②自分を内外両面から見つめてスケッチ
- ③下描き（アイディアプロセススケッチ）
- ④中間鑑賞会、構想の練り直し
- ⑤作品制作
- ⑥作品仕上げ鑑賞・・・完成作品の鑑賞



【写真②】

4 実践から

前年度までは、見えていることやイメージを思うように表せない場面や、構想した形にしようと思っても創造的な技能面での課題を克服できない生徒が見られ、達成感が得られず、自画像という題材の価値を生徒が実感できていないように感じた。

そこで、アイディアプロセススケッチの導入や中間鑑賞による他者の構想の過程について知る機会を設けた。自分の制作時間をさいてモデルになるなど、他者との関わりを自然な形で求め、他者に協働して互いの制作を支え合いながら、行き詰まった状況を克服し、自分なりの工夫を込めた作品の制作を行う姿から「自律」と「共栄」に向かう学びの手ごたえを感じた。

ただし、アートプロセスカード【図②】からは、他者と関わることによって自分の成長を実感する「自律」に向かう視点は見られるものの、「共栄」に向かうまでは達していないことが課題として見えた。

【図②】

月 日	学習内容	私の学習目標	目標に対する振り返り 【成果、次はこうしたい、次までに準備・調べたいことなど】	自己 評価 ABC
	印象に残った作品			
5 - 24	中間鑑賞会 顔	作品に自分の色を つこう	私は、皆の作品を見て自分にはたり ないもの、おもしろいもの、どう なりたいのか、それを修正したの と、色と線の使い方を参考にしたいです。	A
	中間鑑賞会 心	作品に自分の色を つけよう	色々と交流したことで、自分には 足りないもの、自分には足りない ものを参考に、自分には足りない ものを活かして表現したいです。	A

【アートプロセスカードの記述】

仲間と制作途中の作品を見合う中間鑑賞会を行い、その中で仲間と互いの課題について聞き合うことで新たな視点を得ていた。

IV 実践から見えてきたこと

成 果

- ・「自律」に向かう視点で用いた手立ての、アイデアプロセススケッチは、生徒が自分の発想や構想における思考の過程を可視化するという難しさはあったものの、見通しをもって制作を進める上で効果があった。作品が完成に至るまでのプロセスが見えることで、互いの構想の流れや工夫、課題が見えるので、他者の作品への関わりやすさにもつながっていた。
- ・以前は、自分の表現に自信がない生徒は、作品を見せたがらない傾向があった。「自律」と「共栄」に向かう学びとなる授業を展開するための手立てを講じることで、想像通りに表せない作品であっても、皆の目にふれる場所に、自ら作品を展示する姿が見られるようになった。また、授業観察やアートプロセスカードの記述から仲間の作品に対するアドバイスや関わりが増えたことが見えた。

課 題

- ・中間鑑賞会では、ただ作品が掲示されても、課題意識が高まっていなかったり、アイデアプロセススケッチをより有効に活用した作者のねらいが見えなかったりすると対話が停滞することがあった。そこに至るまでの行う意味、雰囲気作り、学習環境の在り方などから改善を図る。
- ・前次研究は、生徒自らが「問い」を生むよう教師が手立てを講じるころから授業づくりが始まった。今次研究においてもその研究の成果を踏まえながら研究を進めていく。今次研究では、生徒自らが他者との関わりを求めるよう、そのきっかけや素地をいかにつくるかが問われている。教科内の学習規律を基盤としつつ、机から離れて他者と積極的に関わってよい場面、自分のアイデア構想や制作に没頭する場面、それらを自分で調整できるように手立ての見直しを図っていきたい。
- ・「共栄」に向かう視点に関して、生徒の発言や行動が、関わる者同士全ての成長を願うものまでとはいえない状況がある。切磋琢磨しながら共に高め合っていくためには、生徒と教師ともに対話によって課題解決に向かう中での仲間や教師からの評価の重要性を感じている。

V 引用・参考文献

<引用文献>

- 1) ハーバード・リード『芸術による教育』フィルムアート社、1943年
- 2) 文部科学省 教育課程企画特別部会『論点整理』2015年

<参考文献>

- ・池内慈朗『ハーバード・プロジェクト・ゼロの芸術認知理論とその実践』東信堂、2014年
- ・高垣まゆみ『授業デザインの最前線Ⅱ』北大路書房、2010年
- ・鹿毛雅治『学習意欲の理論』金子書房、2013年
- ・東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会『カリキュラム・イノベーション』東京大学出版会、2015年
- ・芝池宗克、中西 洋介『反転授業が変える教育の未来』明石書店、2014年
- ・奈須正裕 編集代表、守屋淳、澤田稔、上地完治『子どもを学びの主体として育てる』ぎょうせい、2014年
- ・Sue.Fostaty.Young・Robert J.Wilson 『「主体的学び」につなげる評価と学習方法』東信堂、2013年
- ・平山勉『本物のアクティヴ・ラーニングへの布石 授業を創る・学校を創る』黎明書房、2016年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』2008年